

開発教育ワークショップを中核とした 高大連携活動の成果と課題 — 「学力の3要素」の育成を中心に—

杉村 美佳

はじめに

上智大学短期大学部杉村ゼミナールでは2016年度から2019年度（2020年度以降は新型コロナウイルス感染症拡大により中止）にかけて、埼玉県北足立郡にある国際学院高等学校との高大連携活動の一環として、2年生による高校生を対象とした開発教育ワークショップを実践してきた。開発教育ワークショップとは、開発をめぐる問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、公正な地球社会づくりに参加することをねらいとした参加型の学習活動である。連携校の国際学院高等学校は、ユネスコスクールとしてESD（持続可能な開発のための教育）に力を入れており、2017年度には日本で初めて開催されたユネスコスクール交流会のホスト校を務め、実践的な国際理解教育を行っている。

高大連携のあり方について文部科学省は、2012年に「高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携(高大連携)の在り方について」でその方針を明示したが、高校生が大学レベルの教育研究に触れる機会を促進する取り組みとしては、大学での授業の受講や大学教員の出前講座等が挙げられるにとどまっている¹。さらに文部科学省は、2016年に高大接続システム改革会議の「最終報告」において、高等学校教育から大学教育への接続を通じて一人一人に「学力の3要素」を育むことの重要性を強調した²。この「学力の3要素」とはすなわち、

- (1) 十分な知識・技能
- (2) それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力
- (3) これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

を指す。しかしながら、その後、文部科学省によって実施された高大接続の取り組みは、大学入学者選抜改革に重点がおかれ、高大連携における「学力の3要素」の育成方法については明確な施策が示されずにきた。その結果、実際の高大連携活動は、大学教員が高校に向いて授業を行う「出前授業」や高校生によるオープンキャンパス等への参加が中心となり³、文部科学省が重視する「学力の3要素」を育成する活動やその成果の分析はほとんどみられない。したがって、高校生と大学生が主体となった高大連携活動による「学力の3要素」

を育成する実践を積み重ね、さらにその成果を分析した研究を進める必要があるであろう。

一方、本稿で取り上げる開発教育を中核とした高大連携活動については、実践自体がこれまでほとんど行われておらず⁴、こうした活動が「学力の3要素」の育成にいかんにか資するかに ついても明らかにされてこなかった。そこで本稿では、世界各国で食品原料等として使用されているマレーシアのパーム油をめぐる問題をテーマとした開発教育ワークショップによる高大連携活動を通して、高校生と短大生が「学力の3要素」をいかに修得したかを分析し、活動の成果を考察する。具体的には、高校生がパーム油からマレーシア、開発、環境問題、搾取、児童労働等の問題へといかに視野を広げ、どのようなことを学び、考察したのか、また短大生は実践を通してどのような学びや課題を得たのか等について、高校生と短大生の「振り返りシート」と短大生を対象としたアンケート調査の分析を行う。さらにこうした取り組みの課題についてイギリスの開発教育との比較から検討する（なお、「振り返りシート」のひらがな表記は適宜漢字表記に改めた）。

1. 開発教育と「パーム油のはなし」の概要

本活動の中核をなす開発教育とは、「私たちひとりひとりが、開発をめぐるさまざまな問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、共に生きることのできる公正な地球社会づくりに参加することをねらいとした教育活動」⁵、「文化的多様性を前提としながらよりよい開発とは何かを考え、より公正な地球社会と多文化共生社会をめざして自ら参加していくための知識、技能、態度を養う教育学習活動」⁶等と定義づけられる。

本高大連携活動では、こうした開発教育を推進するネットワーク NGO である開発教育協会が開発、発行した教材「パーム油のはなし—地球にやさしいってなんだろう？」を用いてワークショップを行った。この教材は、ポテトチップ、チョコレート、カップラーメン、アイスクリームなどの原料になっているパーム油を通して生産国で起こっている問題を知り、その問題の構造を理解し、さらに私たちの消費社会とのつながりを理解し、何ができるかを考えることをねらいとしている。その内容は、パーム油に関する基礎知識が得られるクイズと解説、パーム油の原料である油ヤシの収穫に関わる開発や児童労働などに関する写真教材、油ヤシ農園開発関係者会議のロールプレイ用カードと解説などから構成されている。SDGs、大量消費・大量生産のライフスタイル、グローバリゼーション、南北問題による貿易の不均衡や搾取、プランテーション開発、先住民族、熱帯雨林、児童労働など、さまざまなテーマを内包しており、教材を通して複雑に絡みあう歴史的、文化的、構造的な問題を学ぶことができる⁷。

パーム油は、おもにマレーシアやインドネシアでプランテーションという形で生産されている。日本では主として食用に使用されており、天然の植物性油脂のため、「地球にやさしい」というイメージのもと、洗剤やせっけんにも使用されている。しかし、生産国では非常に多

くの問題が起こっており、本当に「地球にやさしい」のかを問う教材構成となっている。マレーシアのボルネオ島サラクワ州では、森林の伐採による熱帯雨林の減少や、先住民族の生活環境の破壊が深刻になっており、またマレー半島では児童労働やプランテーション内のみの生活を強いられる等の問題も生じている。この教材はこうした生産国の犠牲の上に成り立つ日本人の消費生活を見直し、「持続可能な社会づくり」を考えるきっかけとなる内容となっている。

2. ワークショップの準備と進行

まず、ゼミ生は開発教育協会のファシリテーターによる「パーム油の話」のワークショップを受け、その内容理解や手法を修得した。先述のように、「パーム油の話」の教材は、SDGs、大量消費・大量生産のライフスタイル、グローバリゼーション、南北問題による貿易の不均衡や搾取、プランテーション開発、先住民族、熱帯雨林、児童労働など、さまざまなテーマを内包しており、複雑に絡みあう歴史的、文化的、構造的な問題を学ぶことができる。その一方でこうした多様なテーマを扱う教材であるだけに、ゼミ生にはそれらのテーマに関する知識を各自が深く理解し、解説しながらワークショップを進行できるようになることが求められた。

その後、ゼミの1年生を対象に実際にワークショップを行い、反省点や改善点を話し合った上で国際学院でのワークショップに臨んだ。本ワークショップでは「パーム油の話」の教材の使用に加え、東京オリンピックに向けて新国立競技場が建設された際にマレーシアの熱帯木材が伐採され使用されていたことを報じる新聞記事を読み、パーム油の収穫のために森林が伐採され生活が脅かされている先住民族の苦悩の現状を撮影したドキュメンタリーを視聴した。また、並行して英語も学べるよう、キーワードは英語でも併記して提示した。

ワークショップに参加した高校生は、毎年約24名であり、6人ずつ4つのグループに分かれてもらった。ワークショップではまず、アイスブレイキング、パーム油を原料とする製品のパッケージを提示し共通点が何かを問うクイズ、パーム油に関する基礎知識が得られるクイズと解説、パーム油の原料である油ヤシの収穫に関わる開発や児童労働などに関する写真教材の並び替えとその解説、マレーシア政府役人、農園開発企業の幹部、洗剤メーカー課長、先住民族の村の村長、環境保護NGOスタッフからなる「油ヤシ農園開発関係者会議」のロールプレイと、ロールプレイの役から離れて農園開発の是非を問う話し合い等を行った。以下の写真①は、油ヤシ農園開発の是非に関する話し合いの様子である。

写真① 農園開発に関する高校生の議論の様子



3. 高校生の振り返り

本節では、高校生の「振り返りシート」の分析を通して、本活動が「学力の3要素」の育成にいかん資するものであったのかについて検討する。

まず、「今日のワークショップで気づいたことは何ですか？」という設問に対する回答を整理すると、①パーム油 ②マレーシア ③環境問題 ④開発問題 ⑤日本・日本人に関する意見が多くみられた。以下、テーマごとに主な意見を表1および表2にまとめて紹介する。

表1 パーム油やマレーシアについて気づいたこと

1	パーム油が世界で使われていることを今日初めて知りました。(6名)
2	パーム油が多くの食品や洗剤などで使われていることを知りました。
3	世界で一番多く使われているが、その反面苦労や危険を背おっている人たちがたくさんいるということを知れた。
4	パーム油は今も昔も日本と少なからず関連していること。それを考えた取り組みが個人や国の単位で求められていること。
5	現地の人たちが手作業で収穫していることや、すべてが初めてで新鮮でした。日本では新国立競技場でたくさんマレーシアの木が使われていることも初めて知りました。
6	パーム油について、開発者や先住民の主張を両方ともよく考えて判断するのは難しいことが分かった。
7	パーム油を取り過ぎてしまうと現地の住民にとっても、環境にとっても悪いと感じました。しかし、どんな事にも使える汎用性は良いことだと思います。ただ森林伐採によって生物が死滅している事は考え直すべきだと思います。
8	日本にただけではインドネシアやマレーシアの状況は分からないこともあるのだと気付かされました。例えば、日本では洗剤でパーム油が使われていたりして、環境にやさしいと売られているけれど、その裏では地球温暖化や人権侵害などにもつながっている。

9	マレーシアは同じ国の人でも、先住民の方など、生活の仕方が異なる人々が住み、森林で暮らしているために政府の人ともめているので、国としての体制が整っていない。
10	マレーシアがかかえている問題は深刻で、僕にも出来る事は何かを早く知りたいです。そして、それを実行するために、日々学んでいきます。

表2 環境問題や開発について気づいたこと

1	「環境にいい」「環境にやさしい」などは日本には得ることがあるけれど、マレーシアなどの自然が破壊される場所では有害なガスが発生したりと環境にいいことだけではないということが分かりました。
2	自分が思っている以上に環境問題が大問題と分かった。
3	世界には深刻な環境問題や貧しい人々がいることを改めて実感しました。そして、自分たちが今とても幸せな環境で暮らしていることを実感しました。
4	一度壊した自然は簡単にはもとにもどらないことを強く感じました。
5	森林伐採、農業開発で、労働や環境、子、孫にとって何が良いのかを考えるのはとても難しかったです。
6	伝統文化をなくしたくない村長と土地を売ってお金をもらい子どもに教育を受けさせたい村長の意見で同じ民族でも違う考えを持っていることがわかりました。
7	森の大切さや農業開発の賛成・反対のそれぞれの考えを知れ、それを決めるのはとてもむずかしいと思った。
8	どちらの意見も大切であるし、どちらにも利益・不利益がある。文化などを考えれば反対だが、子供の将来、今後のことを考えると賛成になると思った。
9	普段何気なく使ったり食べたりしているものの中に、民族を捨てさせて作ったプランテーションによって生産されたものが含まれていることを知り、犠牲になっている人がいることを忘れてはいけないもっと多くの人に知らせていくべきだと思った。私はリップなど使いきらず捨ててしまっていたのでしっかりと様々な人に感謝して使いきろうと思った。
10	自分が知らないことがたくさんあり、商品が作られるということは、裏で問題があることを忘れないようにこれからパーム油が使用されている商品を大切に使用したいと思った。
11	様々な問題があり、その問題も多様化してきていて解決するのが大変だと思った。
12	何かが発展していったり、問題解決をすることのためには小さいと思っても当事者として考えると大きすぎる犠牲があることを知って、もっと世界や産業について大きく広い視点で見ることができた。先進国のために自分を犠牲にしなくてはいけないことがとてもかわいそうだと思った。
13	先進国が発展、または有利になるにつれて途上国が犠牲になってしまうことに気づいた。自分達が生活していくうえで、それを支えてくれる人達の生活を破壊しているのだと思いました。
14	いつも食べているお菓子が児童労働によって作られていることが分かった。

15	私たち日本人のために、遠くの地球の環境をこわしてしまうことがあることを深く考えることができました。
16	はじめは農園開発について賛成していたが、説明を聞いて政府はお金を出すとんでも、1日28円しか稼ぐことができなかつたり、女性は仕事で体に危険なものを扱っていたりと、自分が思っていた状況よりも深刻だと思った。
17	農園開発に関しては、反対です。危険な上に賃金も少なく環境にも悪いなら、開発すべきではないと思います。
18	パーム油について、開発者や先住民の主張を両方ともよく考えて判断するのは難しいことが分かった。
19	話し合いを通じて、それぞれのメリットデメリットがよく分かりました。賛成・反対の意見が大切なんだなと思いました。
20	答えを知りたいです。話し合うというのもいいですが、意味不明のことを言う人もいれば、正しいことを言う人もいるのだと思った。

以上のコメントをもとに、本高大連携活動について「学力の3要素」の育成という観点から以下、考察を進める。第一に、「知識・技能の修得」については、表1-1、1-2の意見のように、パーム油の存在や幅広い用途を初めて知ったという意見や、表1-8のように、日本で多用されているパーム油が地球温暖化や人権侵害などの多くの問題につながっていること等、パーム油やパーム油をめぐる問題に関して初めて知識を修得した生徒が多かった。また、マレーシアの現状については、環境問題の深刻さに初めて気づかされたという意見が多かった。さらに、「油ヤシ農園開発関係者会議」のロールプレイと農園開発の是非に関する話し合いを行ったためか、農園開発をめぐる問題に関する知識の修得が最も多く、農園開発の問題を自分事として受け止め、解決策を模索する姿勢もみられ、予想以上の深い学びが得られたことが窺える。90分という短い時間ではあったが、本ワークショップのねらいの一つでもあるグローバル化や貧困、児童労働、環境問題、貿易問題、SDGs等、幅広い問題に関心をもった生徒が多かった。

第二に、「知識・技能を基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力」については、表2-8のように、開発の是非について、「どちらの意見も大切であるし、どちらにも利益・不利益がある。文化などを考えれば反対だが、子供の将来、今後のことを考えると賛成になると思った。」という意見がみられ、話し合いを通して他者の意見を吸収して自身の思考を深め、答えのない問いに解を見出していく思考力、判断力、表現力が育まれている様子が窺える。一方で、表2-18（「パーム油について、開発者や先住民の主張を両方ともよく考えて判断するのは難しいことが分かった。」）や表2-20（「答えを知りたいです。話し合うというのもいいですが、意味不明のことを言う人もいれば、正しいことを言う人もいるのだと思った。」）のように、多様な主張を照らし合わせて判断することを難しいと感じている生徒や、話し合いを通して解を見いだすよりも、答えを知りたいと感じている生徒もみられた。

第三に、「これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の育成については、表 2-7（「森の大切さや農業開発の賛成・反対のそれぞれの考えを知れ、それを決めるのはとてもむずかしいと思った。」）や、表 2-19（「話し合いを通じて、それぞれのメリットデメリットがよく分かりました。賛成・反対の意見が大切なんだなと思いました。」）のように、クラスメートと協働したロールプレイやディスカッションを通して他者の考えへの理解を深め、尊重し、自身の思考の枠組みや学びを広げている様子がみられた。

4. 短大生の振り返り

ワークショップを実際に行った後に記載した短大生の「振り返りシート」を整理すると、「高校生から学んだこと」と「事前準備と実施方法の工夫について」に関する意見が多くみられた。以下、主な意見を表 3 および表 4 にまとめて紹介し、彼女たちがいかに「学力の 3 要素」を修得したのかについて考察していく。

表 3 ワークショップを通して高校生から学んだこと

1	自分が思ってもないことを高校生が述べていて、そんな意見もあるのかと自分自身が学ぶこともありました。なかなか高校生と一緒に、しかも自分たちが授業を行うという経験はないと思うので、とても貴重な時間となりました。
2	ワークショップを通して非常に厳しい環境に置かれている国の人々の存在を知り、衝撃をうけたという感想を聞き、とても有意義なワークショップであったなと強く感じました。
3	最初は開発に賛成だと言っていた人からも率直な意見が聞けて良いワークショップが出来たなと思いました。
4	1つ提示すると 10 も 20 も反応が返ってきて、難しいと共に楽しかった。
5	高校生が出してくれる意見に、あえて違う角度から意見を投げかけてみたり、質問してみると、高校生たちは私の意見を受け止めてから、また違う意見を出してきてくれたのでとても興味深かった。
6	新聞記事では SDGs のことを詳しく学んでいた子が多かったので私たちの方がその知識に驚かされた等、今回のワークショップを通じて誰かの前に立って物事を教えるといった貴重な経験ができ、私たちも多くのことを学ぶことができた。
7	高校生たちは、一つ一つにとても真剣に取り組んでくれて、意見を言う場面においても、私たちが考えることのないような意見を積極的に発言し、議論してくれたので、私たち自身も勉強になりました。

表4 事前準備と実施方法の工夫について

1	今回の高校生を相手にしたワークショップに向けて、メンバーで集まって模造紙にグラフや表、その他のキーワードを書き、説明する際に分かりやすく説明できるよう工夫した点はとても良かったです。また、事前に打ち合わせをして手順や提示のタイミングを改善できました。
2	今回は模造紙にグラフや表、重要なポイントを書き、必要な時に模造紙をホワイトボードに貼って説明することができた。また、前はグループ内での打ち合わせ不足があり、パッケージを出し忘れるという事態になったが今回は事前に流れを確認し、その流れを紙に書いて共有したことにより、出し忘れや順番が分からなくなるといったことはなかった。
3	前は、ロールプレイでの話し合いが長くなってしまったので、ひと通り話した後、生徒たちの意見をポストイットに書いてもらい（1枚に1つの意見）、賛成、反対に分けて似た意見同士をくっつけて共有し、話し合いを深めていきました。お金という視点で考えた時に、賛成、反対側両方に意見があることに気づいたり、後から入ってきた人たちが好き勝手言うのは違うという意見や、デメリットの方が大きいから反対といった意見もでて、様々な視点から考えることができたと思います。
4	高校生たちが積極的に発言してくれて進行がスムーズで非常に良かった。ポストイットを使ったことでアイデアを整理するのに役立った。やはり、反対意見が多く、賛成意見が出づらかったのでディスカッションをするとき、ジレンマが生まれづらかったと思う。時間配分が当日上手くできていて、ディスカッションに時間を割くことができてよかった。
5	アイスブレイキングでは、高校生同士も名前を覚えられるような積み木形式での自己紹介を行ったことで、お互いに話しやすくなるよう工夫しました。途中で席を変えたことで特定の人同士が話してしまって他の子たちが入れなくなるといったことが起こらないよう工夫しました。
6	高校生の中に1人、車いすの生徒がいたため、体を動かさない、簡単な clap hands game を行った。

写真② パーム油について説明する短大生



写真③ ディスカッションの総括をする短大生



以上の振り返りから、第一に、「知識の修得」については、表 3-6 のように高校生から SDGs について学んだ他、表 3-1（「自分が思ってもないことを高校生が述べていて、そんな意見もあるのかと自分自身が学ぶこともありました。」）および、表 3-7（「私たちが考えることのないような意見を積極的に発言し、議論してくれたので、私たち自身も勉強になりました。」）にみられるように、自分たちにはない視点から高校生が発言したことにより、新たな気づきや学びを得た様子が窺える。

第二に、「知識・技能を基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力」については、表 3-5 のように高校生の意見を受け止めたうえで、あえて違う角度から意見や質問を投げかけて解を導いた様子が窺える。

第三に、「これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」については、表 4-1 から表 4-5 にみられるように、ゼミで 1 年生を対象にワークショップを行った際の反省を生かし、事前にグループで打ち合わせをして、模造紙にグラフや表、その他のキーワードを書き、説明する際に分かりやすく説明できるよう工夫したり、手順や提示のタイミングを改善したグループが複数みられた。また、高校生の意見をポストイットに書いてもらい、似た意見を分類して共有し、話し合いを深めることで様々な視点から考えることができるよう工夫したグループもあった（写真②および③参照）。このように、以上の「振り返りシート」の検討から、本高大連携活動は短大生の「協働して学ぶ態度」の育成にも効果があったと考える。

5. 短大生を対象としたアンケート調査結果の分析

本節では、2017 年度生および 2018 年度の短大生を対象として行ったアンケート調査結果（23 名中 15 名が回答）をもとに、本高大連携活動がいかに「学力の 3 要素」の育成に資するものであるかを検討する。

まず、開発教育ワークショップの実施を通して「十分な知識・技能を修得したか」につい

では、図1のように、60%が「そう思う」、40%が「ややそう思う」（「あまりそう思わない」、「そう思わない」は0%）と答えた。

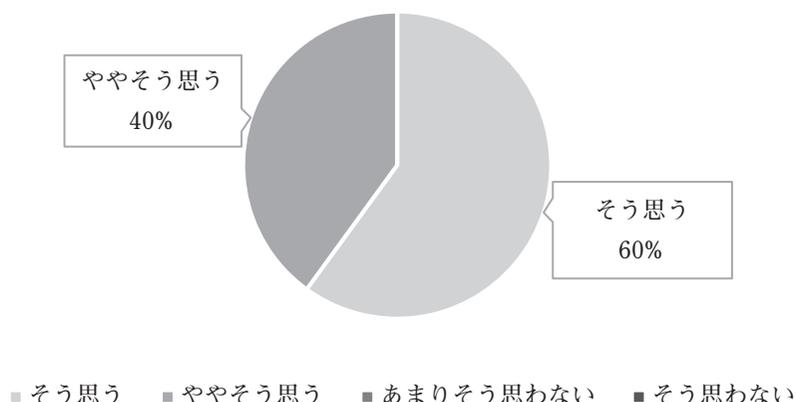


図1 十分な知識・技能を修得したか

回答の理由としては、「実際に受動的に学ぶより、能動的に発表することでどうしたら相手にわかりやすく伝えられるか?を考えるため、要点をまとめて自分の中でも落とし込むことができたから」、「十分とまでは言い切れませんが、ワークショップを行うにあたってそれらの問題に関する本や資料を読んだり調べたりしたので、ある程度身についたと思います」、「普段の生活の中では触れなければ気づかずにいた問題について身近な例を出し合ったり話し合いをして意見や考えを学ぶことができたから」、「事前準備で高校生が理解できる表現や説明に変換するなかで、自分の理解もある程度深めることができた」、「パーム油の問題を高校生に共有し、高校生がどう考えるかどういう答えを導くかを考えることでより一層知識を深められたと思う」という意見がみられた。

このように、本活動の実施にあたり、短大生にはパーム油をめぐる問題を解説し、議論を促して総括する力等が求められるため、事前に本や資料を調べて知識を積むとともに、それを高校生にわかりやすく伝えられるよう試行錯誤する中で理解を深め、話し合いを通して新たな考え方や伝え方を学ぶことで十分な知識・技能を習得したと実感していることが窺える。

次に、ワークショップを通して「知識・技能を基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力を修得したか」については、図2のように、80%が「そう思う」、20%が「ややそう思う」（「あまりそう思わない」、「そう思わない」は0%）と答え、非常に高い数値となった。

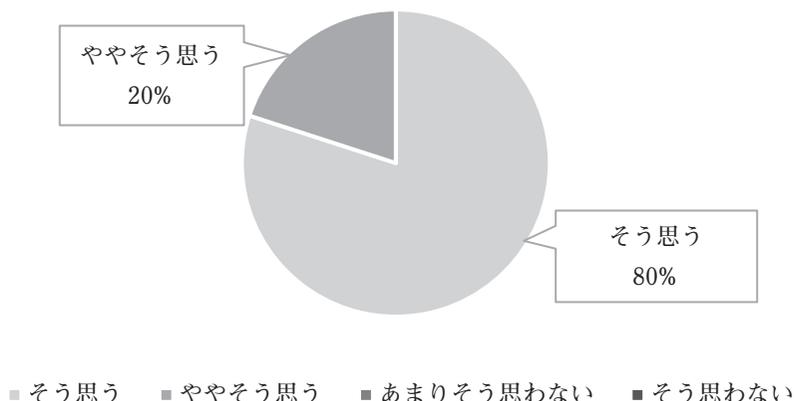


図2 答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく
思考力・判断力・表現力等の能力を修得したか

その理由としては、「ロールプレイをする中で逆の立場の意見を考えたり、共通理解や和
解点などを探ることで批判的思考力が身についたと思うから」、「周りの考えを聞きながら解
を見つけることで物事の視野が広がり様々な視点で捉えられた」、「ゼミ生のみならず、高校
生の考えも幅広く知れたため」、「メリットがデメリットを上回るのか、それともデメリット
がメリットを上回るのか、個人個人によって考えは異なっていた。それをお互い共有するこ
とでより知識を深められ、より探究する力が強くなったと思う」、「自分で学んだ知識を高校
生にわかりやすく伝えるにはどうすれば良いか深く考えた」という意見が挙げられた。

ワークショップの進行役にはファシリテーターとして中立的な立場で議論を有益な結論に
導くことが求められるが、以上の意見からもロールプレイやディスカッションの進行を通し
て批判的思考力や多角的な視野、探究力、深い思考力、わかりやすく説明する表現力が身に
ついたことが窺える。

第三に、「これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度が修得できた
か」については、「そう思う」が93%、「ややそう思う」が7%（「あまりそう思わない」、「そ
う思わない」は0%）で、「学力の3要素」の修得の中で最も高い数値となった。

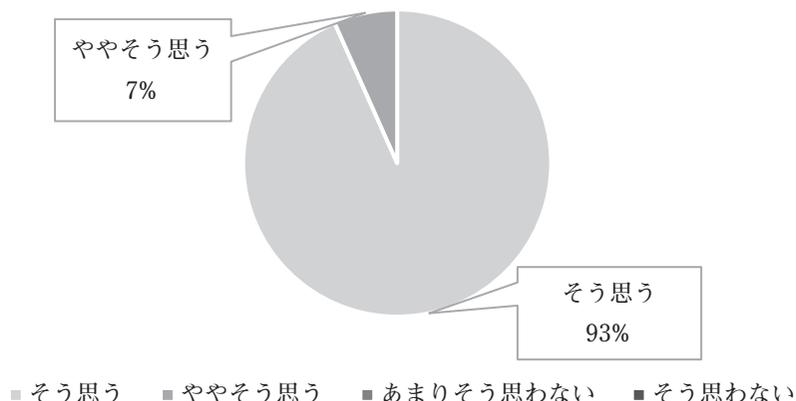


図3 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度が修得できたか

回答の理由としては、「主体性と協働性がなければ進行できなかったと思うから」、「そもそもこの模擬授業をやることで、南北問題や環境問題に危機感をもったため、主体的に世界的な問題に意識を向けるようになった。さらに様々な立場での考えの違いを認識して問題を考えるようになったから」、「何度も繰り返し議論することで、発言をする機会が増え、それぞれが自分の意見を伝えることができたから」、「一方的に聞いて他人事のように学ぶことよりも、主体性を持って他人と一緒に学ぶ方が良いのだと体感し、それ以外の機会でもそう学ぼうとするようになったと思う」、「高校生にワークショップをグループで行い、一人ずつ前に立って話す機会を設けた。自分自身が主体となってやる機会を与えられたからこそ、この経験から主体性を持って周りの人々と関わりを持っていけるようになったのではないかと思う」等のコメントが挙げられた。このように、グローバル化をめぐる問題を自分事として考え、グループで議論したり自ら意見を発信してワークショップを進行した経験を通して、主体性、協働性を身につけることができた実感している学生が多かった。

以上の結果から、本活動を通して短大生が「学力の3要素」のいずれも十分に修得できたと考えており、とりわけ思考力、判断力、表現力や、主体性をもって協働して学ぶ態度の修得において非常に高い成果を得られたことが明らかになった。

6. 開発教育を中核とした高大連携活動の課題—イギリスの実践事例との比較を通して—

以上、本稿では、開発教育ワークショップによる高大連携活動が、高校生、短大生双方の「学力の3要素」の育成に資することが明らかになった。先述のように、現行の高大連携活動は、オープンキャンパスや高校生を対象とした大学教員による講義が中心であるが、文部科

学省が目指す高等学校教育から大学教育への接続を通じた「学力の3要素」を育成するには、本活動のような高校生、大学生双方の思考力、判断力、表現力の育成や、主体性、協働的な学びに重きをおいた活動が求められるのではないだろうか。こうした実践を積み重ねていくことが、高等学校と大学との接続における一人一人の「学力の3要素」を伸ばすことにつながっていくであろう。

最後に、開発教育のパイオニア的存在であるイギリスにおける実践事例との比較から本活動の課題を指摘しておきたい。イギリスでは、1970年代以降、国際NGOが開発教育を牽引してきた。こうしたNGOは近年では地球的課題に批判的かつ積極的に関与する学習者を育成するグローバル・シティズンシップ教育の一環として開発教育に取り組んでおり、とりわけ「社会参加」を重要視している。たとえば、貧困や不正を根絶するために持続的な支援・活動を90か国以上で展開している国際NGO団体のオックスファム（OXFAM）やクリスチャンエイド（Christian Aid）などのNGO団体が自らの国際協力活動をもとに積極的に開発教育の教材作りを行い、学校と連携して国際協力に資する人材育成に関わっている。このうちOXFAMは、*EDUCATION FOR GLOBAL CITIZENSHIP: a guide for schools*という小・中・高等学校向けのグローバル・シティズンシップ教育の教材を発行している。このガイドブックによれば、学校がOXFAMと連携して生徒の「社会参加」を促進する活動が活発に行われている。

たとえばOXFAMと連携してWorld Shapersというプログラムを実施しているロンドンのDeptford Green Schoolでは、ウガンダのカンパラにあるSt. Kizito SchoolやナイジェリアのラゴスにあるRainbow Collegeと提携して食品技術プロジェクトを開発した。このプロジェクトの目的は、学習者のリサーチスキルを向上させ、彼らの栄養や世界規模の食糧システムに関する知識や理解を深めることであった。各学校の生徒たちは地元の食品市場を訪れ、商人や顧客にインタビュー調査をして販売されている食品の価格と栄養価を記録し、価格変動が購買習慣や栄養に与える影響を探った。その後、生徒たちは3つの学校の調査結果をまとめ、共通点や違いについて振り返りを行った。さらにDeptford Green Schoolでは、このプロジェクトにおいて生徒たちが自分たちの選挙区の国会議員と面会する機会を設け、生徒がプロジェクトの結果を発表し、イギリス政府に飢餓を克服するための責任を果たすよう政策提言を行った⁸。このようにイギリスの開発教育では、国際協力NGOと連携した授業が多く展開されており、学校内での知識の修得に留まることなく、途上国の学校と協働した調査や討議、政府への政策提言などの「社会参加」を通して地球規模の問題解決に貢献している。

一方、本高大連携活動は教室内での参加型学習に留まっていることから、今後はイギリスの実践のように国際協力NGOや途上国の学校等と協働して、学校や教室内での学習に留まらない地球的課題の解決に向けた活動へと展開していくことが望ましい。そうした実践が、「学力の3要素」が目指す新しい社会で生き抜く力の育成につながっていくと考えられる。

最後に、本学学生に貴重な学びの場を提供していただき温かくご指導くださった国際学院高等学校の諸先生方と本活動の実施にあたりお力添えくださった上智大学短期大学部英語科教授の平野幸治先生、そしてアンケートの集計にご協力いただいた杉村ゼミナール OG の丸山乃野さんに心から感謝の意を表したい。

写真④ ワークショップ終了後の集合写真



註

- ¹ 文部科学省 (2012) 「3. 高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携 (高大連携) の在り方について」 文部科学省 「大学への早期入学及び高等学校・大学間の接続の改善に関する協議会 (平成 17 年度～) 協議経過の中間的な整理」 (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/houkoku/06040408/001/004.htm) (最終閲覧日: 2025 年 1 月 23 日)
- ² 文部科学省 (2016) 「高大接続システム改革会議『最終報告』」 pp.4-9 (1369232_01_2.pdf (mext.go.jp)) (最終閲覧日: 2025 年 1 月 23 日)
- ³ 文部科学省 (2021) 「大学における教育内容等の改革状況について」 p.30 (https://www.mext.go.jp/content/20230908-mxt_daigakuc01-000031526_1.pdf) (最終閲覧日: 2025 年 1 月 23 日)
神原信幸 (2011) 「日本とアメリカの比較から高大連携の政策アプローチを再考する」 日本高等教育学会編『高等教育研究』第 14 集、pp.130-131。
- ⁴ 先行研究では高等専門学校生が小中学校に出向いて開発教育を含めた ESD (Education for Sustainable Development、持続可能な開発のための教育) の出前授業を行った事例が一つみられるが、これは小中学生を対象にした活動であり、また次世代型技術者の育成を主眼としている (西井靖博他 (2020) 「持続可能な開発のための教育に対応した学生主体型出前授業の開発と実施」 日本工学教育協会編『工学教育』68 (6))。
- ⁵ 開発教育協会 「開発教育とは」 (<http://www.dear.or.jp/org/2056/>) (最終閲覧日: 2025 年 1 月 23 日)
- ⁶ 田中治彦 (2008) 『国際協力と開発教育ー「援助」の近未来を探る』 明石書店、p.215
- ⁷ 開発教育協会 (2018) 『パーム油のはなしー「地球にやさしいってなんだろう?」』 開発教育協会、p.1
- ⁸ OXFAM (2015), *EDUCATION FOR GLOBAL CITIZENSHIP: a guide for schools*, OXFAM GB, p.11. (edu-global-citizenship-schools-guide-091115-en.pdf) (最終閲覧日: 2025 年 1 月 23 日)

